

グローバル化ということ

関西大学 社会安全学部 小澤 守

我が国でグローバル化が叫ばれて久しい。文部科学省の指針に従って、現在では小学校の教科に英語が組み入れられている。最近新幹線の中で、とある雑誌に現在の英語教育の在り方を痛烈に批判した記事を目にした。筆者も多くの点でその記事に賛同するものであるが、今回は筆者の経験も交えて、外国語、特に英語の問題について私見を述べてみたい。

筆者の受けた外国語教育を礼賛するわけではないが、高校までの英語教育は読み書きに重点が置かれた、英文読解、文法、作文などが基本的な内容で、その後でてきたLL教室などといった会話型の教育など受けたことがなかった。大学では高校と同じくテキストの読解というより翻訳中心の授業であったが、唯一英語学と言ったらいいのだろうか、英語が如何にして形成されたかといった内容の講義があり、実に面白かった。以降、研究を通じて洋書や文献は当然のことながら多数読み、また英語で論文を執筆するのもあたりまえであった。日本語、英語に関わらず、そろそろ退職するというのになかなかいい文章は書けないが、読み書きは非常に重要であるといまさらながら実感している。

筆者が学生であった当時は、第2外国語まで必修で、機械系では大部分の学生がドイツ語をとり、文法はもちろんのこと、カフカなどの小説もテキストとして使われた。極めつけはカラマーズフの兄弟の読書感想文をドイツ語で書くという宿題であった。筆者はなぜかドイツ語にはよくなじみ、大学で助手として採用されたのち、ドイツ語学校には1年半も通った。ただ、日本語の中でドイツ語を学んだためか、ほとんど上達せず、そのままで1年2カ月におよぶ西ドイツ滞在が始まった。日本で中途半端に習っていたせいも、最初の語学研修の2カ月間、ゲーテ・インスティテュートの中級クラスに入る羽目になってしまった。同じクラスにいたスペイン、キプロス、フランスなどからきた連中のしゃべることしゃべること。クラスで討論に選ばれたテーマに対して積極的に自分の考えを伝えたいという彼らに完全に圧倒された2カ月間であった。その後、カールスルーエ大学にて1年間研究活動を行った。その時聞いた話が今回の本題である。

とある日本人の研究者が夫婦でドイツに滞在していて、奥さんは全くドイツ語を理解されなかった。それでも八百屋にいて白菜（ドイツ語ではキナ・コール）を指さし、日本語で「白菜ちょうだい」と言った。これを数回繰り返すと、八百屋の主人もすっかり慣れて、指差しなしで「白菜」と言えば白菜が出てきたという。これを単なる慣れと理解することもできようが、注目すべきは話す側にほしいもの、必要なもの、あるいは伝えなければならないものがあり、聞き手に相手の意思をくみ取る姿勢があれば、お互いにコミュニケーションができるということだ。ドイツ人の友人を筆者の実家に連れていき、英語もドイツ語もわからないお袋に引き合わせた時も、一方は日本語で、一方はドイツ語で意思疎通がある程度できていた。

つまり、話す中身を持つことが何より大切であるということ。日本語をベースとし、日本

語から離れることが不可である我々にとっては、まず「国語」をしっかりと身に着け、自国の歴史を知り、文化や社会を理解することが先決である。何も知らない子供に中途半端な英語を教える意味があるのだろうか。彼の地に行けば赤ん坊でも英語やドイツ語を話している。それは彼らにとっての国語だからである。

国際会議で質問などした筆者について、その様子を見ていたある教授（もちろん日本人）が、彼は態度が悪い、自制心がないなどと批判をしていたとまた聞きをしたことがある。禅寺であるまいし、国際会議では沈黙の美德など存在しえないと思うのだが。そういえば、40年も前にドブロウニクで英国の非常に著名な教授と昼食を共にした時、「お前は他の日本人と違う」と言われ、「どこが」と聞き返したら、「他の日本人はself-controlが効いている」との答えが返ってきた。大変なお褒めに与ったものである。

